

を

ゴ  
」

る

い

みて

平仮名七文字「縛り」で今年はタイトルをつけているのだけなぜこんな「縛り」にしてしまったのか…、適当に考えるとロクな事がない。「ここでいいです」「いきおいはない」と書いて「どこをみている」、今月もう一本書く予定だからこれにも縛りは適用される訳で既に弱っている。この縛りの一番の問題はタイトルが覚えにくいという事で、未だに皆「ここでいいです」と言ったりする。「いきおいはない」なんかあったかどうかとも忘れ去られている。とまあこのように、その場で適当に言ってるとあとあと大変だよ、というお話ですこれは。

～公演パンフレットより～

登場人物 男1

男2

女

前説・店員・家主

男1が箸を手に掃除している。

と、前説がやってきて、

前説

本日はオイスターズ第十六回公演「どこをみている」にお越し頂きまして誠にありがとうございます。すでに開演してしまいましたがお客様にお願いがございます。携帯電話など音の鳴るような物は必ず電源からお切りください。上演中にあらかじめ決められた以外の音が鳴ってしまいますと役者が動揺してしまいます。許可の無い撮影、飲食喫煙もご遠慮ください。役者が動揺してしまいます。非常の際は係員の指示に従って下さい。上演時間はこれから一時間、十分を予定しております。途中休憩はございません。

男2がやってきて前説に向かって、

男2

給与明細見たんですけど、そしたら何回か遅刻ってなってるんですけど、遅刻って事になってて給料引かれてるんですけど、僕のシフトは五時からなんですけど、僕五時に間に合わなかった事一回もないんですけど、確かに四時五十分までにタイムカード押すように言われてますけど、それに間に合わなかったら給料引かれるなんてそれマジですか？マジで言ったんですか？ちよっとおかしくないですか？五時からシフトで十分前までにタイムカード押してないとなんで給料引かれるんですか？だって五時からなんですよね？全然遅刻してないじゃないですか？僕らは十分前から給料貰ってないからサービス残業ですよね？どうしてこっちがサービスしてるのにペナルティがあるんですか？おかしくないですか？

前説

…。

男1がいつの間にか男2の後ろに立っている。

男2

シフトにしたってこっちの希望もつともきいてくれないじゃないですか。なんで出れないって言うてる日に入ってるんですか？それで無理して調整してきてるのに給料引かれるってどういう事ですか？頭に来てるの僕だけじゃないと思いますよ。ずーつと言いたかったのを我慢してたんです。なんか言っして下さい。

前説

…。

男2、男1をチラッと見る。

男1、うなづく。

男2

じゃあ僕、今日で辞めさせて貰いますね。今までありがとうございます。…とは言いたくないけどご応言しました。じゃあ。

男2、歩き出す。

男1も「フンツ」みたいな顔をして後についていく。

前説

それでは「どこをみている」どうぞ大らかな気持ちでご覧ください。

前説、去る。

男2、歩いている。それについていく男1。

男2、靴にゴミでも入っているのか立ち止まり、靴を脱いで中をトントンとやってまた履く。

その間、男1は立っつて見ている。

男2

…。

男2、再び歩き出す。

男1はついていく。

しばらく行くとまた男2は立ち止まり、靴をトントンやる。

男1は黙ってそれを見ている。

男2 (靴を履いて) …なんですか？

男1 栗木君？

男2 はい…。

男1 栗木君だろ？

男2 …はい。

男1 良く言ったね。

男2 え？

男1 偉いね、君。

男2 ああ…。

男1 凄いな。

男2 …いい加減溜まってたんで。

男1 偉いよ。

男2 いえ…。

男2、歩き出す。

男1もついていく。

男1 店長の顔、皆に見せたかったなあ。

男2 じゃあ、お疲れ様でした。

男1 一言目には本社の方針だつて言うけどさ、アルバイトの意見も聞けないような会社は潰れてしま  
えばいいんだよ。

男2 これで少しでも良くなれば本望です上僕は、じゃあ僕こつちなんで。

男1 良くならなかつたつていいよあんな店。

男2、また靴をトントン。

男1 僕らのような有能な働き手を失つてあとで吠え面かくがいいさ。

男2 …。

男1 もともと僕はあの会社はブラックだと思つてたんだ。最初の採用面接の時と言つてる事まるで違  
うもの、週休二日はもらえらつて聞いてたのに実際は月に三日も貰えないし、休みを申請すると白い  
目で見られるし、僕はね、あんなところで過労死なんかゴメンなんだからね。

男2 …えつと、誰さんでしたっけ？

男1 僕？

男2 ええ。

男1 岡田でいいよ。

男2 …え、岡田さんじゃ、ないんですか？

男1 ううん。

男2 …じゃあ岡田さんじゃないですか。

男1 まあね。

男2 …ん？

男1 だから、岡田でいいよ僕なんて。

男2 …え、岡田さんも辞めたんですか？

男1 辞めたよ、きつぱりとね。君だけ悪者にさせる訳にはいかないからさ。

男2 …え、いつ辞めたんですか？

男1 さつきたよ、君と一緒に辞めたんじゃないか。

男2 …。

男1 せいせいしたよ、全く。

男2 …店長、気づいてないんじゃないですかね？

男1 気づいてるさ、だつてちらちら僕の方を見てたもの。

男2 …へえ。

男1 まあそりゃあ確かにこれから大変だけどね、別のバイト探さないといいけない。でもあの状況で先  
の事なんて考へてる暇なかつたからさ、仕方ないよ。もお、そういう覚悟があるなら先に言つておい  
てくれなきゃ困るじゃないか。

男2 …。

男1 ああいいよいよ、遅かれ早かれ僕も言うつもりだったんだ。で、君はこれからどうするの？

男2 まだなんにも決めてませんけど…バイトは探しますよ。

男1 そっじゃなくてさ、家に帰るの？

男2 ああ、まあ、はい。

男1 独り暮らし？

男2 ええ。

男1 そっか。

男2 じゃあ、お疲れ様でした。

男1 まあなんとかなるさ、一緒に頑張って行こう。な。

男2 …？

男1 僕は戦友だからね。

男2 …。

男1 いいって、気にすんな。

男2 …。

男1 ハハ。

男2、また靴をトントン。

男1 石、取れないの？

男2 なんか違和感があるんですよ。

男1 どれ？

男2 いやいいですよ。

男1 それさ、靴に入ってるんじゃないの？

男2 …え？

男1 足の裏

男2、足の裏を確認する。

男2 なんにもなってないです。

男1 だったら怖いね、はは。

男2 …じゃあ僕こっちなんで。

男2、歩き出すと男2もついてくる。

男2 …え？

男1 それにしてもむしゃくしゃするよなあ。(キョロキョロして) こうして歩いてるうちの何人かは行

くんだろうなあ、あの店に。

男2 …。

男1 あーあ、むしゃくしゃするなあ！

男2 …あ、ちよつとごめんささい。(携帯を取り出し) ああ、うん。あ、ホントっえ、今どこああ

わかった。うん、じゃあ今から行くわ。はい、はい(電話をしまい)。すいません、じゃあ僕これ

からテレビ塔の方まで歩いて行かなきゃならないんで

男1 ああ、そうなんだ。

男2 じゃあ、今日はホントにありがとうございました。

男2、歩き出す。

男1もついていく。

男1 僕はね、君のような人に憧れていたんだ。ホントに。

男2 …え？

男1 君は偉いよ。

男2 …もお、何言ってるんですか。

男1 間違っている事にはつきり文句が言えるじゃないか、僕はダメなんださういうの。全然言いたい

事が言えない。

男2 …いや、

男1 一体どうしたら、君みたいになれるんだろうなあ。

男2 やめてくださいよ。

男1 優柔不断だしね、本当にはつきりした事が言えない、もうわからないんだ、自分の気持ちだ。だ

けど君は違う、ちゃんと自分の道は自分で選んでいる。尊敬するよ全く。

男2 あ…えっと(名前が出てこない)。

男1 岡田でいいよお。

男2 岡田さんってお幾つなんですか？

男1 三十です。

男2 ああ…。

男1 そう、もう二十なんですよね。未だにアルバイト生活だ。このままじゃ親に顔向け出来ないからね。本当は実家に帰りたいんだ僕。

男2 じゃあ帰った方がいいんじゃないですか？バイトもひと段落ついた事ですし。

男1 そうだねえ。

男2 帰った方がいいですよ、ちようどいいですよ。

男1 そうかもしれないね。

男2 どこなんですか、実家。

男1 名古屋です。

男2 …あ、市内なんですな。

男1 うん。今住んでるところから歩いて五分くらいなんだ。

男2 うんもう帰りましょうよそれ。

男1 でも今のままじゃあね…。

男2 …じゃあ僕、この辺で。

男1 あ、もうテレビ塔？

男2 …まだなんですけどこの辺りで待ち合わせなんです。

男1 彼女？

男2 んー…まあ、そう…ですなえ。

男1 いいなあ、僕なんか一回も付き合った事ないからね。

男2 そうなんですな。

男1 なかなか僕なんか、相手にしてくれる女性は居ないからね。

男2 そんな事ないと思いますけどね。

男1 そうかなあ。

男2 じゃあまたどこかで。

男1 ここに来るの？彼女

男2 …いや、まあここじゃあないんですけど…。

男1 どこ？

男2 …テレビ塔の近くにきたら電話するように言われてるんで。

男1 ああ。

男2 ええ。

男1 いいよ、して。

男2 …あ、はい。

男2、電話をかける。

男2 あ、もしもし？うん、今テレビ塔の近くなんですけど…。ああ、あ、はいはい。うん、わかるわかる。わかった、じゃあそこに行くね。はいはい。(電話を切って)なんか彼女、東急ハンズで待つてるみたいなんです。

男1 ああ、ハンズ？

男2 ええ、ちよつと怒ってたんで、急いで行きますね。

男1 ちようど良かった。僕もね、こことちよつとハンズに行くうと思っていたんだ。

男2 …え？

男1 急ごうか。

男2 …何買うんですか？

男1 うん、あのね、木の棒。

男2 …ん？

男1 このくらいの長さの。(金道が)こつちだよな。

男2 …木の棒は、何に使うんですか？

男1 うん、子供の頃にさ、良くやったでしょ、指に乗せてさ、こつちやって

男2 ああ、箒とかで。

男1 そうそう、さつき久しぶりにやってみたら楽しくてね。

男2 …それで、木の棒を？

男1 うん。

男2 …箒でいいんじゃないですかね？

男1 でも僕には棒があればいいからさ。

男2 あれ棒だけだとやりにくいんじゃないですかね。  
男1 そうなの？

男2 ええ。いやまあいいんですけど別に。

男1 じゃあ箒にしようかなあ、

男2 まあその方が…

男1 あれ、閉まってるねハンズ。

男2 …。

男1 彼女、大丈夫？

男2 …え？

男1 ハンズ閉まってるけど…？

男2 ですねえ、

男1 どこで電話受けたのかな？閉まってるのに。

男2 …、

男1 大丈夫かい？

男2 …ちよつと電話してみますね。

男1 うん、電話してみた方がいいだろうね。

男2、電話をかける。

男2 あ、もしかして？東急ハンズ閉まってるんだけど今どこ…え？ああはいはい、あそこね、はい。

了解。はい、じゃあすぐ行く。

男1 どこに居るって？

男2 なんかくすぐ近くの居酒屋なんですけど、

男1 居酒屋かあ、あーなんかむしろくしゃりするなあ！

男2 ええ…

男1 こんな日は軽く一杯やりたい気分だよなあ。

男2 …あ、今日、彼女の誕生日なんですよ、

男1 ちよつと栗木君、せつかく彼女の誕生日なのに居酒屋はないんじゃないのかい？

男2 …そのあと移動するんです。

男1 ああそうか。

男2 じゃあ僕行きますね。

男1 こんな事言うと君から反感を買うのはわかってるんだけどね、

男2 …はい？

男1 君の彼女大丈夫かい？

男2 …何が、ですか？

男1 嘘ついてるんじゃないのかな

男2 え？

男1 だってハンズ閉まってたよ。

男2 …電話切った後に閉まったんじゃないですかね？

男1 電話切ってからそんなに時間経ってなかったよね？

男2 そう…ですか？

男1 あれくらいの時間だったらきつと電話掛けてる時にはもう店員さんは閉店準備してるよきつと。

男2 うーん…

男1 だったらハンズで待ち合わせなんて言わなければいいじゃないか。ハンズには初めから居なかつたんじゃないかな。

男2 …まあとにかくお店に行ってみますんで。

男1 そこにも居ないかもしれないよ。

男2 …。

男1 ついてってあげるよ。

男2 …。

男2、歩く。

男1、ついていく。

男2 あ、この店です。

男1 もし居なかつたらすぐ戻って来るといいよ。

男2 …大丈夫ですよ。じゃあ。

男1 じゃあね。

男2、隅の方へ。

男1、待っている。

男2、もじもじしている。

と、居酒屋の店員がやって来て、

店員 いらつしやいませおひとりですか？

男2 …あ、えっと、

店員 カウンターでよろしいですか？

男2 …はい。

店員 こちらへどうぞ。

男2、移動。

店員 お飲み物どうぞ。

男2 …あ、生。

店員 生中いつちよ。おつまみもどうぞ。

男2 …あ、…鳥のなんこつ揚げ。

店員 鳥なんこついつちよ。

男2 …以上で。

店員 …はい。

店員、去る。

音楽。

字幕が映し出される。 \*【】で閉じられた文字は字幕

【僕は／うまれてはじめて／一人で居酒屋にはいった／和なのか洋なのか／

統一感のない店だ／客は僕以外に／いない】

店員、戻って来る。

店員 どうぞ。

店員、ビールを手渡し、鳥のなんこつは持ってあげている。

男2はそれを一粒一粒、黙々と食べる。

【僕は今／鳥なんこつを食べている／一人で／鳥のなんこつを／食べている／一人で／

うん／鳥の／なんこつだ／これは鳥の／なんこつ／なんなん／こつこつ／

なんこつこつ／なんのこつつちや／の鳥なんこつ／僕は一人／なんこつを／食べている】

男2 (ビールを流し込み)…ちそうさまでした。おあいそ。

店員 九八〇円です。

【高…】

男2 …はい。

店員 (お釣りを渡し) ありがとうございます。

店員、去る。

男2、外へ出ると男1が立っている。

仕方がないので俯いて脇を通り抜けようとするが、

男1 あ、どうだった？

男2 居ませんでした。

男1 やっぱりな！おかしいと思っただやっぱりな！

男2 ええ…

男1 なんなんだぞいつ。誕生日に何をやっているんだ。栗木君をだまして、何を考えているんだ。

男2 まあしかたないですよ、彼女がこういう方法をとったのなら、受けとめるしかありません。

男1 やり方が汚いよ。なんでこんな方法をとるんだ。どうして面と向かって言わないんだ、大事な話

じゃないか。

男2 そうですね…

男1 なんて女だ！

男2 うん。

男1 そんな女でも君はまだ、好きとか言うんじゃないだろうね。

男2 …突然なんで、ええ

男1 やめときなよ。

男2 …そう、ですわね。

男1 だって平気で嘘をつく女だぜ？

男2 …そうですわ仕方ない、もう諦めよう。

男1 でも好きなんだろう？

男2 …はい。

男1 じゃあ電話しなよ。

男2 …え？

男1 電話。

男2 …いやいいですよもう。

男1 いや、した方がいい。店長にあれだけの事を言えたんだ、彼女にも言ってあげた方がいいに決まってる。

男2 …はい。

男2、電話をかける。

男2 あ、もしもし？…今、店まで行ったんだけど…？

男1、電話の声を聞こうと近づく。

男2 なんだよそれ！冗談じゃないよ！バカ！

男2、電話を切る。

男1 なんだって？

男2 もう、僕とは別れるって。

男1 今の電話の短さだと理由は言っていないね。

男2 …ええ

男1 いきなり別れるって言ってきたんだね。

男2 そうですわね。

男1 なんちゅう女だ！

男2 もういいですよ、仕方ないです。

男1 いやダメだよ、ちゃんと理由を聞いた方がいい。

男2 でも僕とはもう話をしたくないと思います。

男1 電話を切ったのは君じゃないか、彼女はまた何かを言いたいかもしれない。

男2 …そうですわね。

男1 してみなよ。

男2 …いや僕も、彼女の事は…ほんと…(泣く)

男1 ごめん、僕が感情的になってしまった。

男2 …もう、僕の事はほっといてください。

男1 どれくらい付き合ってたの？

男2 …一年です。

男1 まあ一年で良かったよ。何年も付き合ってたらもっと深い傷になってたかもしれない。逆に良かったと思おうよ。どうせろくでもないよ…こんな嘘つきな女、もっといい人と出会ってという暗示だよ。きつと。良かったね。

男2 …はい。

男1 まあすぐには楽にならないと思うけど…

男2 大丈夫ですよ、振られるのは初めてじゃないんで。

男1 一人で大丈夫かい？

男2 ええ。

男1 今日、何も用事が無ければ飲みにも付き合っただけど、

男2 …え？

男1 今日僕、塾があるんだ。

男2 …じ、塾？

男1 英語の。  
男2 英語？  
男1 休んじやおうかな。  
男2 あ、いや、いいですよそんな！まあ残念ですけどねそりゃあ。  
男1 ごめんね…。  
男2 いいですよ！  
男1 一人で大丈夫かい？  
男2 大丈夫ですよ。ホント、最後に岡田さんと話が出来ただけで、ええ。  
男1 僕もだよ。もっと話したかったけどね。  
男2 そうですね。  
男1 そうだ、じゃあその携帯電話の番号を教えてくださいませんか。  
男2 …はい。…あ、じゃあ、言いますね。  
男1 うん。  
男2 …あ、メモとか、大丈夫ですか？  
男1 うん、いいよ。  
男2 …えっと、090の1860、2149。  
男1 ありがとう。  
男2 え、覚えてたんですか？  
男1 うん、覚えた。  
男2 凄い…。  
男1 じゃあ僕そろそろ時間なんで…  
男2 あ、もう、ええ、行って下さい。  
男1 じゃあね、気を落とさないでね。  
男2 はい。  
男1 辛い時はいつでも飛んで行くんだからね。  
男2 ありがとう(ご)ございます！(頭を下げる)  
男1 じゃあね。  
男2 お元気で！

男1、去る。  
男2 …なんだよあの入。  
男2も去ろうとする、  
と、  
男1 栗木くん！  
男2 …ん？  
男1 栗木くん栗木くん！  
男2 はい、はい？！  
男1 いやあ栗木くん。  
男2 はい、どうしました？  
男1 さっき栗木君から聞いた番号に掛けてみたんだけどね、繋がらないんだ。  
男2 …あ、もう掛けたんですか？  
男1 うん。そしたら現在使われておりませんってなっちゃうんだ、なんでだろう？  
男2 あ、あれ、間違えたのかな…  
男1 いや、僕が間違えたのかもしれない、もう一回教えてもらえろ？  
男2 あ、はい、えっと…、  
男1 090の  
男2 ええ、090の…  
男1 うん。  
男2 3、  
男1 3？  
男2 …、  
男1 あれ？そこから違うのかな

男2 あ、すいません、さっき教えた番号言つて貰つていいですか？

男1 090の1860、2149。

男2 …あ、それあれだ、妹の番号だ。

男1 え、でも現在使われておりません、

男2 おかしいなあ…

男1 妹さん大丈夫かい？！

男2 あ、前のだ、前の携帯だ。

男1 妹の？

男2 はい。

男1 なあんだ。

男2 すいません。

男1 凄いな、妹の前の携帯番号まで覚えてるんだ栗木君。

男2 まあ、良くかけてたんで。

男1 どうして今は掛けなくなったの？

男2 …結婚したんで。

男1 ああそう。いつ？

男2 …半年くらい前。

男1 そうか。じゃあ仲良かったんだ。

男2 まあ…ですねえ。

男1 寂しいね、結婚してしまつて。

男2 時間大丈夫ですか？

男1 あ、そろそろヤバイな。

男2 どうぞ行つて下さい。

男1 妹さんの前の番号じゃなくて、君の今の携帯の番号が知りたいんだ。

男2 あ、えっと、僕のは…、もうコレです。

男2、携帯を見せる。

男1 「もつ」つてなに？

男2 いや、「もつ」…だから、これ最近新しくしたんで、「もつ」これになってますよって意味です。

男1 よくわからないけど、(画面を見ながら)なるほどね、はい、覚えた。

男2 凄いですね、ホントに覚えてるんですね。

男1 なんにも凄くないよ僕なんて栗木君に比べたら。ほら、他に頭使つてないから僕。

男2 じゃあ、がんばってくださいね、お勉強。

男1 ありがとう。じゃあ飲みに行こう。

男2 はい、是非。

男1 よし行こう！

男2 …ん？

男1 飲みに行くんだろ？

男2 …え、今からですか？

男1 うん。

男2 え、塾は？

男1 もうどうせ遅刻なもの。

男2 …え、まだ間に合うんじゃないですか？

男1 いやもうダメだ。僕ね、今まで無遅刻無欠席だったんだよ。

男2 だったら行った方がいいですよ。間に合いますよ。

男1 ううん、遅刻するくらいなら休んじゃう。

男2 いやいや勿体ないですつてそれは、

男1 塾なんかより栗木君の方が心配なもの。

男2 僕はホント大丈夫なんで、

男1 こういう時こそ持つべきものは友達。しょうがない、今日はととん付き合おうよ。

男2 そんな悪いですよ、

男1 付き合おうよ、朝まで。

男2 いや朝までとかホント…

男1 さあ行くよ！

男2 え、どこ行くんですか？

男1 君うちに決まつてるじゃないか。

男2 いやウチはちよつと！

男1 お店で朝まで飲んでたら幾ら掛かると思ってるんだい。こつちかな？  
男2 いやそつちじゃないですけど、  
男1 じゃあこつちかな、  
男2 あ、そうだ！今日はおばあちゃんが来るんだ。  
男1 え、君の部屋に？  
男2 はい。もう来てると思ってるんですよ。  
男1 そつだったのか…。  
男2 すいません。  
男1 でも今日は君の彼女の誕生日だったんだろ？  
男2 …。  
男1 まさか君、おばあちゃんに彼女を紹介するつもりだったのかい？  
男2 ええ、まあ…  
男1 結婚する気満々だったんじゃないか！それなのに…それなのに！  
男2 ハハ…参つたな、おばあちゃんになんて説明しようかな、かつこ悪いなあ、ハハ。  
男1 …おばあちゃん幾つ？  
男2 …八十…  
男1 八十?!  
男2 もつすぐ。  
男1 それヤバいよ、  
男2 え？  
男1 あんまりシヨック与えない方がいいよ、そのくらいの歳になったら。  
男2 ああそうか…  
男1 どうしようかな…  
男2 まあ上手く説明しておくんで  
男1 僕に何か出来る事はないだろうか、  
男2 無いです。大丈夫ですから。  
男1 そつだ、いいよ。  
男2 何がですか？  
男1 僕が彼女つて事にしても。

男2 …そつちの方がシヨック大きいですから。  
男1 そうか、そつだよね…  
男2 本当にあの、大丈夫ですから、  
男1 でもおばあちゃん、楽しみにしてたんだろ、今日栗木君の彼女に会えるのを。  
男2 …まあ、そつですけどね、  
男1 だつたらダメだよ悲しませたら。  
男2 でも、もつしようがないじゃないですか。  
男1 おばあちゃんが悲しむと、栗木君も悲しいだろ？  
男2 …そりやあまあ、  
男1 僕はね、栗木君が悲しむのが一番嫌なんだ。  
男2 …うーん、  
男1 だつて栗木君は、僕のヒーローだもの。  
男2 …、  
男1 かつこいいよ栗木君は。  
男2 …いくらかつこいいヒーローでも、振られちゃあダメですよ。  
男1 …、  
男2 あーあ、これじゃあヒーロー失格だ、ヒーローのままにいたかつたなあ、残念。  
男1 居ようよ、まだやれるよ。  
男2 いや、もう無理です。現に僕は振られたんですから。  
男1 振られたつてさ、また作ればいいんだからさ、  
男2 …そつ簡単にいきませんよ。  
男1 そんなどうせろくでもない女には幾ら振られたつていいんだよ、おばあちゃんに会わせるのはもつと栗木君に会いたい女性を連れて行けばいいんだからさ。  
男2 …ええ、でも僕はもう帰るんですよ。  
男1 うん。  
男2 帰り道、道すがら新しい彼女を作るのは不可能じゃないですかね？  
男1 ちよつと待つてね、それを考えてるんだ僕は。  
男2 そんな夢みたいな方法があるなら教えて欲しいですけどねホント。  
男1 そつだ、良い手があるよ！

男2 なんですか？

男1 実はね、僕にも妹が居るんだ。

男2 え？

男1 栗木君って今何歳？

男2 ……二十三ですけど、

男1 同じだ！

男2 二年前、二年前の話です…

男1 本当にお願ひしてみようかな…

男2 岡田さん…

男1 うん、この時間なら暇してるかもしれない！

男2 岡田さん！？

男1 妹はね、確かに器量は良くないがとても賢くて献身的な女なんだ。きっと上手くやってくれると思う。

男2 いや妹さんは、そんな、いいですよ、悪いですから。

男1 なんにも気にする事はないんだよ、僕に任せて、

男2 うん岡田さんがそう思ってもね、妹さんは嫌だと思えますよ？

男1 そうかなあ、

男2 だってそんないきなり呼び出されてね、初対面の男の家に連れて行かれて、でおばあちゃんに、この子と結婚しようと思つて紹介されるんですよそりゃあちよつと、僕だったら、なんていうか

…、嫌だなあつて思えますよ。

男1 その点は大丈夫だよ。だって僕は嬉しいんだ、妹が栗木君と結婚してくれるから。

男2 うんあのね、ちよつといろいろ飛んじやってますからそれ、

男1 え？

男2 まずおばあちゃんに紹介するだけですから、今この場を乗り切ればいいだけであつて、とにかく妹さんは呼ばなくてもいいんです。

男1 とりあえず聞くだけ聞いてみてもいいかなあ？

男1、携帯を取り出す。スマートフォンではない。

男2 聞かなくてもいいですから！

男1 栗木君と結婚するんだよつて言ったらすると思つんだ。

男2 言わないでくださいさういふ事。

男1 でも…

男2 戦国時代じゃないんですから、

男1 でも他に居る？

男2 うーん…

男1、携帯を見る。

男2 いいですから！

男1 じゃあどうする？

男2 だって…岡田さんの妹なんですよね？

男1 うん。

男2 実の。

男1 そうだよ。

男2 ……それはやっぱり悪いですよ。これ以上岡田さん一族に迷惑掛ける訳にもいきませんし。

男1 でも他に頼める人が居ないんだもの…

男2 だって血繋がってるんですよ？

男1 ……え？

男2 とにかくちよつと落ち着いて、他の方法考えてみましょう。

男1 まあ最近問題になつてからね親子関係の事とか…そう言われると心配になつて来たなあ、

男2 うん、血がつながつてなければまだいいんですよ僕も。

男1 そうか、ちよつと調べてみようかな…

男2 でも家に帰るまでに結果は出ないですよ？

男1 さすがにね。

男2 だから止めといた方がいいとは思いますが。

男1 血がつながつてなければいいつてどういふ事？

男2 え？…あ、え？

男1 ん？

男2 …だからそれは、ほら、だって僕が妹さんと結婚したら、お兄さんになる訳じゃないですか岡田さんが、

男1 そうだね。

男2 それがなんていうか、照れ臭いって言うか、

男1 僕は栗木君に対して兄貴面はしないから大丈夫だよ。

男2 うんそういう事ではなくて、僕の方が、その、それはやつぱり気を使っちゃいますよね、ほら、バイトの先輩である訳だし、

男1 もう辞めたんだけど？

男2 辞めても、そりゃあ先輩は先輩じゃないですか、

男1 何にも気にする事はないよ？僕はたまにしか君達夫婦のおうちには行かないようにするからさ。

男2 たまに来るんですか？

男1 うん、そりゃあたまにはね、行くよ。

男2 たまっつてどのくらいの頻度なんですか？

男1 まあ週一か二か

男2 結構来ますね。

男1 え、栗木君は行かないの？

男2 ん、どこへですか？

男1 妹夫婦の家。

男2 …ああ滅多に行かないですねえ。

男1 行った事はあるんだよね？結婚前は仲良かったんだから。

男2 まあ、そうですね…

男1 どこに住んでるの？妹

男2 …えっと、滋賀。

男1 滋賀県？

男2 ええ。

男1 の、どこ？

男2 …あの、あのほら、ハハ、滋賀ってほら、何市があるのか日本で一番わからない県ですから。

男1 琵琶湖の辺？

男2 あ、ええ、そうですね、琵琶湖の辺ですね。

男1 じゃあ大津とかかな。

男2 ああ、そこだ、大津だ。そうだ。

男1 ああ、車で二時間くらいのところだね。

男2 ですねえ。

男1 だしたらあんまり行かないか。

男2 行かないですねえ。

男1 でも君達は市内に住むんだよね？

男2 ええまあ…

男1 うちが親戚達もみんな名古屋だからさ、遠くに住むのはさすがに嫌がると思うんだ。

男2 ですよええ、

男1 え、栗木君は美家どこなの？

男2 …え、ウチですか？

男1 うん。

男2 うちは…、ほらあの、大阪です。

男1 あ、大阪なんだ！

男2 ええ、

男1 の割には関西弁でないね。

男2 …まあ、そうですねえ、やつぱりもう、名古屋に来て長いんで、あんまでえへんなあ。

男1 …そうなんだ。

男2 …ええ。

男1 で、ご両親はもう居ない訳でしょ？

男2 え、なんでですか？

男1 だって彼女をおばあちゃんに紹介するって事は、そういう事でしょう？

男2 …ですね…

男1 偉いよやつぱり栗木君は。なんていうかそういうの律儀っていうかさ、ご両親の代わりにおばあ

ちゃんに紹介するなんて、ホントなかなか最近の若者にはないものを感じるよ。

男2 …まあ、親の事はあんま言いたくなかったんですけどね…

男1 何？ご病気？

男2 うーん、その…

男1 え、一度に？

男2 まあ…なんていうんですか、その…

男1 あ、いいよ、無理にその、うん。

男2 すいません、思い出すとちよつと（涙ぐむ）

男1 そつだよね、うん、いいよ

男2 すいません。

男1 後で聞かせて。

男2 …あ、後で…、はい。

男1 だからその辺のところも含めてさ、やっぱり僕は栗木君だけは信じるね。この世の中の誰よりも

栗木君は正直で誠実な男だと思つて。

男2 …まあ、そうやって、うん、育てられましたからね

男1 やつぱりそうか、立派な両親だったんだ。

男2 …でも僕たつてそんな、そういう人間ではありたいとは思つてますけどなかなか、実際は、ええ

…。

男1 うん、そりゃ完璧な人間なんて居ないと思つよ。

男2 ええ。

男1 でも僕の知る限り栗木君は、僕の思う完璧に限りなく近い人である事には違いないね。

男2 まあそう言つて貰えるのは嬉しいですけどね…、

男1 うん。

男2 …ごめんささい、今なんの話してるとしたつて？

男1 だから僕は栗木君に協力できるのがとても嬉しいし、妹もきつと喜んで助けてくれると思つんだ。

男2 ああそうか。でも妹さんの気持ちもありますからね

男1 うん、それを聞いてみてさ

男2 もうその方法しかないんですしたつて？

男1 他に誰か居ればいいけど、誰も連れて行かないって訳にはいかないと思つ、やつぱりおばあちゃん  
の事が心配だから。

男2 そつか、そつ、ですよね。

男1 うん。

男2 岡田さんの妹ですもんね…うーん、

男2、急に走り出す。

男1も後に続く。

男1 栗木君？どうしたの栗木君？

男2 …イヤだ、

男1 栗木くーん？

男2 絶対ヤですよそんな岡田さんの妹さんなんて絶対ヤです僕！

男1 え、なに？

男2 イヤだ、イヤだ、イヤだ！

男2、走り出す。

男1もついていく。

男1 あはは、あはは、

男2 何笑つてるんですか！

男1 こうして二人で走つてるとき、青春を思い出すよね。

男2 岡田さんと青春を駆け抜けた記憶は一切ないんですけど僕！

男1 このまま波打ち際まで走つて行こうよ一緒に！

男2 どれだけ走る気ですかあ？！ここ市街地ですよ！

男1 いやあ実はね、中学高校と陸上部に居たんだよ僕。

男2 …、

男1 長距離の選手だったんだ。毎日十キロは走ってたねあの頃は、今はもう全然ダメだけど。

男2 はあはあ（歩く）…、

男1 どうしたの？何か良い案でも浮かんだのかい？

男2 …いや、ちよつと、知り合いが居たような気がして、

男2、靴を片方脱ぐ。

男1 え、頼めそうな女性かい？  
男2 ええまあ、そうですね。  
男1 そんな子居たんか！どこ？  
男2 …ちよつと、見失っちゃいました。  
男1 探そう、そんな子が居るなら探した方がいい。  
男2 あの、岡田さんで…なんか、あれですよね…あの、意外な、その…、意外ですよね。  
男1 え、なにが？  
男2 陸上やってたんですね。  
男1 うん。  
男2 意外だなあ。  
男1 でも今はもうなんにもやってないよ、だからこんなだらしない身体になってしまった。  
男2 全然息切らしてないし…、  
男1 うん。え、栗木君は？なにやってたの学生時代。  
男2 …僕は、全然大した事ないですよ。  
男1 何？  
男2 あれですよ、演劇部ですよ。  
男1 わ、凄い！  
男2 ありがとうございます。  
男1 そうか、だからか、演劇やってたからあんなに言いたいことがスラスラ出てくるんだ栗木君は。  
男2 うーん、まあそういうわれたらそうかもしれないし、そう言われなかつたらそうでないかもしれないな  
いですね。  
男1 うん、当たり前だよな。  
男2 ですね…。  
男1 ずっと発声練習とかするんでしょ？  
男2 はい…。  
男1 台本とかも一回見たら一瞬で覚えちゃうんでしょ？  
男2 まあ、だいたい役者はそうですね。  
男1 凄いなあ。

男2 役者ですからね。  
男1 早口言葉とかも嘯まずに言えるんでしょ？  
男2 まあ当たり前ですよねえ。  
男1 何か言ってみせてくれないかなあ？  
男2 …あ、僕は照明担当だったんで、  
男1 あ、裏方だったんだ。  
男2 ええ。  
男1 栗木君のような人が裏方だと、役者さんもプレッシャーだ。  
男2 ああ、どうなんですかねえ。  
男1 役者でもないのにあんなにスラスラ言えるじゃないか栗木君は。じゃあ本業の役者の人はどれほどスラスラ言えるものなのか想像もつかないよ。  
男2 そりゃあ凄いですよ、役者さんは。それに引き換え僕なんかもう、  
男1 そんな凄い役者さんを照らすんだな栗木君は。  
男2 ああ…、  
男1 栗木君が照らさないと役者さんは見えないものね。  
男2 ですね…。  
男1 凄いや。  
男2 …でも大人になって何の役にも立ってないですよ僕。  
男1 今だつて照らしてくれてるじゃないか、僕を。  
男2 …え？  
男1 僕の進むべき道を教えてくれる灯台のような人だ。  
男2 …そう言われたらなんか、うん、自信が持てますよな。  
男1 謙虚すぎるよお栗木君は、周りの人が恐縮しちゃうよ。  
男2 そうですね、わかりました、もつと自覚持っていきますねこれから。  
男1 そうしなよ。  
男2 自信持ってナンバしちやおうかな。  
男1 ナン。なんかしなくたってほらさつきの子、急いで探さないと、  
男2 え？  
男1 知り合いで頼めそうな女の子見つけたんだろ？

男2 …ああ、ええ。  
 男1 その子を探した方が早いよ絶対。  
 男2 …どこ行っちゃったかな、チラッと見ただけなんですけど、  
 男1 早く探さないと、どんどん遅くなってしまっな。  
 男2 そうですねえ…、  
 男1 おばあちゃん、待ちくたびれてしまっよ。  
 男2 あ、そうだ！じゃあ岡田さんはあつちをお願いしますー僕はこつちを探しますから！  
 男1 うん、でもどんな子か僕は知らないからさ、  
 男2 ああ…、  
 男1 特徴を教えてください。  
 男2 えっと、チラッと見ただけなんです、  
 男1 うん、いいよ。  
 男2 えっと、髪がこれくらいで（曖昧な感じで）、  
 男1 ン、ん、どれくらい？  
 男2 えっと、まあ、ショートカットですね。  
 男1 耳は？出てる？  
 男2 ですね。  
 男1 出てるのね。  
 男2 はい。  
 男1 うん、で、服装は？  
 男2 なんか…上は、赤くて  
 男1 半袖？  
 男2 はい。  
 男1 うん。下は？  
 男2 赤い、スカートで、  
 男1 赤いシャツに赤いスカート？  
 男2 はい。  
 男1 え、それってワンピース？  
 男2 あ、はい。

男1 それはわかりやすい。うん。  
 男2 白の水玉で。  
 男1 ほお。  
 男2 頭にも赤いリボンつけて、  
 男1 赤いワンピースに白の水玉で頭に赤いリボンね。  
 男2 はい。  
 男1 うん、それミニーちゃんだな。  
 男2 …、  
 男1 その恰好は完全にミニーちゃんだけど大丈夫かい？  
 男2 …あ、じゃあミニーちゃんだったのかな、  
 男1 ミニーちゃんはこんなところには居ないと思うから、コスプレかな。  
 男2 まあチラッと見ただけなんです、  
 男1 チラッと見た割には結構覚えてるじゃないか、さすがだ。  
 男2 まあ相手がミニーちゃんの恰好ですからね、  
 男1 よし、じゃあ僕はこつちだね。  
 男2 あ、はい！  
 男1 見つけたら電話するね！  
 男2 お願いします！  
 男1 じゃあね！（走り去る）  
 男2 ありがとうございます！

男2、男1を見送った後、靴を履いて逃げるように走り去る。  
 すぐに携帯が鳴った。  
 男2、確認して、出ない。  
 走る。携帯は鳴っている。よりによって着信音が「太陽にはえろのテーマ」だ。  
 携帯を両手で握り締めて音を漏らさないようにするが、  
 それがなんか銃を持って走っているみたいだ。  
 携帯は鳴り止まない。  
 と、正面から男1が電話を掛けながらやってきた。

男1 あ、栗木君！

男2 …はあはあ、…はあはあ、

男1 ここだよ栗木くん。

男2 (電話に出て) はい、もしもし。

男1 ニー、ニー (手を振る)

男2 あ、見つかりました？

男1 うん、それがね、ホント偶然なんだけどさ、会えたんだよ、妹に。

男2 …え？

男1 今、妹キャラクターショーのバイトやってさ、その練習してたんだその公園で。

男2 …まさかミニーちゃんの恰好してたんですか？

男1 ハハハ、だったら凄い運命感じたのね。

男2 …。

男1 それでね、事情話したら協力してくれるって。

男2 …。

男1 どうする？

男2 …ミニーちゃんは？

男1 ミニーちゃんは見つからないもの。でもよく考えてらん、こんな時間にこんなところでミニーちゃんの恰好してる奴はどつかしてると思うよ。ろくな状態じゃないよ。

男2 …。

男1 おばあちゃんだつてびつくりしちゃうよ、フィアンセだつて紹介された女性がミニーちゃんのことスプレ着たら。

男2 …岡田さん、

男1 はい。

男2 …。

男1 もしもし？

男2 …もしもし。

男1 はい。

男2 …僕、岡田さんの思ってるような人じゃないです。

男1 ……え？

ちなみに二人はまだ電話を通して話している。

男2 僕、嘘はつかっています。

男1 …嘘？

男2 もう嘘はつきりです。いや嘘はつかってないです。…彼女も始めから居ませんし、妹も居ません。そもそも電話も掛けてないですし、おばあちゃんも家で待つてないです。…すいません。

男1 …。

男2 …。

男1 栗木君…、君という人は。

男2 ホントすいません！

男1 そういうところだよ。

男2 ……え？

男1 君のそういうところが素晴らしいんだ。

男2 …ん？

男1 僕に迷惑掛けまいとして君は、

男2 …あの、

男1 大丈夫、妹も君と同じくらい優しい人間だ、君の助けになるなら喜んでやってくれる。

男2 ホントです。ホントに嘘なんです。

男1 気にしないでいいんだよ、僕らはやりたくてやるんだから。

男2、男1に近づくと電話は切らない。

男2 岡田さん、僕を見てください。本当なんです、本当に、僕は嘘つきなんです。

男1 …嘘つき者が、そんな真つ直ぐな目をして、自分は嘘つきだなんて言うかい？

男2 だつて本当なんです。

男1 君はこの町の良心だ。いやこの国の希望だ。

男2 それはかすぎます。僕は本当に嘘つきで、心の汚い人間なんです。

男1 本心に心の汚い人間は心が汚いなんて思わないものだよ。白い服に一点のシミがついただけで気になるのと一緒で、栗木君の心は真っ白なんだ。

男2 立ちションしますよ。

男1 したいならするがいい。

男2 ……じゃあもういいですよ飲みに行きましよう朝まで。家におばあちゃんなんか居ませんから全然気にする事ないですから。で、ベロンベロンに酔っぱらってその辺の植え込みで寝てやりましようゲロ吐きながら。

男1 良い奴だな、君は。

男2 ……こんなもーん！

男2、靴を片一方だけ捨てて歩き出す。

男1 妹、遅いなあ。

男2 岡田さんの妹はぶっさいくです、僕ぶっさいくだけはダメなんです、ぶっさいく見ると病気がちになるんです、

男1 そんな憎まれ口を叩いても無駄だよ。

男2 憎まれ口じやないです、本当なんです。僕は見た目でしか人を判断しない人間なんです。美人は三日で飽きる、ぶっさいくは三日で慣れるとは言っけれど、年に数回はぶっさいくです、あーやっぱ不細工だなあ、つて。その時に「あーやっぱ美人だな」つて思うのとは精神衛生上全然違っと思っんです。

男1 ホント面白いなあ栗木君は。

男2 本当ですよ！これはホントに言ってます。台本とかじゃなくて僕が、僕の言葉で言ってるんです心から。

男1 どこに向かっているんだい？

男2 僕の家ですよ。僕はもう帰るんです。

男1 歩いて行けるのかい？

男2 ええ、新菜にあるんです。新菜のマンションに一人で住んでるんです僕。

男1 凄いなあ、新菜つて都会だろう？

男2 そうですよ。なんでかわかりますよ、親から仕送り貰ってるんですよ僕。ボンボンなんですよ。

男1 ボンボン？

男2 実家が金持ちなんです。

男1 ボンボン？

男2 もういいですよボンボン繰り返さなくても。そうです、両親たつてびんびんしてますよ。定年迎えて海外旅行とかしょっちゅう行ってます。だから僕もこうやってぐうたらやっても困った事なし、バイトだつて別にいつ辞めたつて良かったんですよ、だからあれだけの事が言えたんです。岡田さんの尊敬するポイントなんて実はその程度の事だつたんですよめんなさい。

男1 (涙ぐみ)そこまで自分を痛めつける事はないのに…。

男2 僕のマンションはあれですよ！あそこに見える背の高いマンション、あれです。あそこ七階に住んでます僕。

男1 あそこか。

男2 まるで家族が住んでそうなマンションに一人で住んでるんですよ僕、嫌な奴ですよ。

男1 (遠くを見て)あ、あれは妹だ栗木君、あれ妹だよ。おーい。

男2 どうぞ一人で来てください、僕の嘘がわかりますから。そもそもおばあちゃんが居ると言ったのも僕は岡田さんと飲み明かすのは嫌だからです。だから飲みにも行きませんから。

男1 おーい、こつちこつち、おーい(手を振る)

男2 ……うわあ、ぶっさいくが歩いて来るぞ。あーあ、ぶっさいくのくせに…、歩いてくるんじゃないよ、歩き方までぶっさいくだなあ、

男1 こつちこつち、

男2 ……ヤダなあもお、ぶっさいくつてのはどうしてあもやる事なす事すべてがぶっさいくに見えるんだらうか、まるで周りの空気もぶっさいくにして歩いて来るみたいだ。一歩歩いてぶっさいく、二歩歩いてぶっさいく、踏みしめた地面からぶっさいくな花が咲く、さあみんな逃げろ、ぶっさいくが通るぞ、気をつけろ、

男1 こつちこつち、

男1、手を振っている。

男2 ……早く来いよ！おつそいなあ！何をシタラ歩いてやがるんだぶっさいく！そつやつてゆつくり歩いてるとぶっさいくの残り香がとどまって迷惑なんだ！美しい人や物に、



男1 寝てないかもしれないんだろ？

男2 …まあそうですね。

男1 早く行こう！

男2 …、

男1 (立ち止まり) 妹よ、あれが見えるかい？あそこに建っている背の高いマンション、栗木君はあそこ七階に住んでいるんだぞうた。

女、一歩前に出て両手を組み合わせ、目をキラキラさせて憧れの態度。

男1 僕らは古い長屋に住んでるからね、偉い違いだ。(歩き出す)

男2 (ついていき) …え、岡田さんも、一緒に行くんですか？

男1 うん、あのね、行く。

男2 なんで？

男1 妹の保護者として僕も挨拶しておくんだ。

男2 …あ、だったら手ぶらだと、アレですよ、

男1 なに？

男2 印象が、アレですよ、

男1 アレって？

男2 だから、悪いですよ、

男1 え？

男2 何か買いに行きましようか。

男1 ああそういう事が、確かに手ぶらだとまずいね。

男2 ええ。

男1 何を買って行けばいいかな？

男2 菓子折的な物でいいと思うんですけどね…、

男1 お菓子か、どれがいいかな…、

男1の頭上からポテトチップスが落ちて来て、

男1 これと、

チップスター、

男1 これと、

堅あげポテトも落ちてくる。

男1 これでいいかな。

店員やつてくる。

店員 イラッシャイマセ。

男2 岡田さん、こんなスナック菓子じゃなくて、

男1 え？

男2 もうちよつとなんかあるじゃないですか、

男1 そうか、コンビニで買った物だと嫌な顔をするんだね君のおばあちゃんは。

男2 いやそういう言い方をされるとアレですけど…、

男1 アレって？

男2 こんなポテトばかりじゃなくてもうちよつと良さげな、

男1 え、そういうのはどこに売ってるの？ハンズはもう閉まつてたけど。

男2 ハンズには売ってないですよ、

男1 ねえ栗木君、僕が君にこんな事を言うのはおこがましい事だとはわかってるけど聞いて欲しい。

男2 なんですか？

男1 早くした方がいいと思うよ。おばあちゃん寝ちゃろうよ。

男2 デパートみたいな、

男1 デパート？イオンかい？

男2 イオンはデパートじゃないですよ…。

男1 イオンにも売っていない物がこの世にあるのかい？！

男2 松坂屋的なところですよ。

男1 いいかい、ハンズも閉まってるんだ。松坂屋だって閉まってる。

男2 …うーんと、

男1 イオンは近くにあるのかい？

男2 イオンは無いですね、

男1 ねえ栗木君、僕らよつと泣きそうだ。

男2 え？

男1 (妹を見て) やっぱうちのような貧乏人とは家柄が釣り合わないのかな…、

男2 (店員に) これ下さい！

男1 コンビニに売ってる物じゃ満足しないんだろ君のおばあちゃんは。

男2 もうなんでもいいんです物なんて、要は気持ちですから。

店員、お菓子を袋につめる。

店員 ヨンヒヤクコジユウヨエン、デス。

男1 あ、いいよ僕が出すから。

男2 …え？ああ、すいません。

男1 僕らの手土産なのに栗木君が払うのはおかしいじゃないか。

男2 すいません。

男1 いいよいいよ。えーつと…えーつと、四百五十…、(妹に) お金持ってる？

女 …。

男1 …。

男1と女、男2を見る。

男2 僕払います。

男2、財布から千円を出して店員に渡す。

男1 なんか、ごめんね。

男2 …いいですよ。

店員、袋を男1に渡し、お釣りを数えている。

男1 …中国の人かな。

男2 …ですかね、

男1 アー、【中国の人ですか？】(字幕も出るが、台詞も喋る。もちろん日本語)

店員 【はい、北京から来ました。中国の人ですか？】

男1 【僕は違います。】

店員 【顔がキンシコウに似ていますね。】

男1 【大きなお世話です。】

店員 【はい。】

男1 【私、中国語少しか勉強しました。】

店員 【私も日本語を勉強したいと思つて来たんですけど、なかなか上達しなくて困つてます。】

男1 【大学生ですか？】

店員 【はい。】

男1 【日本にはどのくらいいるんですか？】

店員 【もつと半年になります。】

男1 【友達を作るといいですよ。】

店員 【なかなか出来ないのです、お友達になつて下さい。】

男1 【嫌です。】

店員 【それは残念です。】

男1 【私はイイ人ではありません。でも諦めないでください、日本人にもいい人は居ます、彼のように。】

店員 【彼はイイ人ですか？】

男1 【はい、彼はとてもイイ人です。日本人の模範となる人です。】

店員 【じゃあ彼とお友達になりたいです。】

男1 【でも彼は中国語を話せません。】

店員 【これはペンですか？】

男1 【はい、それはペンです。】

店員 【じゃああなたが通訳してください。】

男1 【嫌です。】

店員 【それは残念です。】

男1 【なぜなら私はイイ人ではないからです。その時の気分によっては嘘を伝えるかもしれないです。】

店員 【それは困ります。】

男1 【お仕事頑張ってください。】

店員 【ありがとうございます。】

店員、お釣りを数えている。

男1 彼は語学留学をしに来ただけで、友達が居なくて寂しいらしいよ。

男2 岡田さんで…中国語も話せるんですか？

男1 うん、少しだけね。

男2 …へえ。

男1 それで君に、友達になつてくれないかって言ってる。

男2 …いや僕、中国語喋れませんし、

男1 (店員に) 【やはり彼は君とはお友達になれないそうです。】

店員 【そうですか、とても残念です。】

男1 【それはペンですか？】

店員 【はい、これはペンです。】

男1 【どうか気を落とさないでください。そうだ、そのお釣りを貰えるか聞いてみましょうか？】

店員 【それは是非お願いしたいです。このお釣りを自分の物に出来たら牛丼が食べられます。】

男1 【わかりました。】(男2に) ねえ栗木君、これは相談なんだけど、このお釣りを彼にあげてみてはどうか？

男2 …え、どうして？

男1 【彼はとても困っています。】

男2 …どうしてそんな話になるのかな？

男1 【君の事をイイ人と紹介しました。友達になれないのならせめてお釣りでもという話になりました。】

男2 …うん、だから、どうしてそういう話になるのかわからないのです。

男1 【そうですか、それは残念です。】

男2 すみません。

男1 【ごめんなさい、やはりお釣りを貰う事は無理でした。】

店員 【そうですか、とても残念です。】

男1 【それはペンですか？】

店員 【はい、これはペンです。】

男1 【それはあなたのペンですか？】

店員 【いいえ、これは私のペンではありません。】

男1 【誰のペンですか？】

店員 【お店のペンです。】

男1 【お釣りが貰えなくてごめんなさい。】

店員 【一生懸命働こうと思います。】

男1 【それがいいです。】

店員 【だけどこの給料は安いのです。なぜならこの店はいつも暇です。働けど働けど、わが暮らし楽にならないうえ。】

男1 【石川啄木ですね。】

店員 【じつと手を見る。】

店員、お釣りを見つける。

男1 【…栗木君、やはりお釣りをあげるべきではないでしょうか。】

男2 ですから僕がお釣りをあげる筋合いはないです。だいたいこのお菓子のお金だって僕が払うのは筋違いだと思います。

男1 【それはペンですか？】

店員 【はいこれはペンです。】

男2 どうしてちよいちよい。ペンを確認するの？さつきから何回か。ペンを確認してるの僕わかってますからね！

男1 【彼は今大変怒っています。】

店員 【見ればわかります。】

男1 【お釣りを返して下さい。】

店員 【わかりました。ですが彼は本当にいい人ですか？】

男1 【はい、彼はとてもいい人です。】

店員 【でもお釣りは貰えないのですか？】

男2 いい人だからってお釣りはくれません！なんにもしないのにお金をくれる人はきつと悪い人です

からホイホイ貰わない方がいいですよ！

店員 【彼は今なんと言ったのですか？】

男1 【お釣りをくれる人は悪い人です。私はいい人なのでお釣りはあげません。と彼は言いました。】

店員 【彼はケチではないのですか？】

男1 【彼はケチではありません。いい人なのです。】

店員 【わかりました。】

男1 【向いの高級マンションに住んでいるのです。なのでケチではありません。】

店員 【私は近くのボロいアパートに住んでいます。風呂もトイレも共同です。】

男1 【それは私も同じです。】

店員 【わかりました。】

男2 (女の視線を感じて) もういいです、お釣りあげます！

店員 【ありがとうございます。】

男2 どうして今のはわかったんですか？！

男1 【良かったですね。】

店員 【お釣りを貰うのにこんなにも時間がかかってしまった。もう帰ってください。】

男1 【わかりました。】

店員 【私は忙しいのです。】

男1 【お仕事ががんばってください。】

店員 【私は働かなければならないのです。】

男1 【がんばってください。】

店員 【働いて働いて、お金を貯めて、スポーツカーを買うのです。】

男2 バカ野郎だな。

店員 【これはペンですか？】

男1 【はい、それは

男2 それはペンです！自分のペンもわからないのか君は！

店員 【早く帰りなさい。】

男1 【ありがとうございます。】

男2 もう行こう！

一人、歩き出す。

男2 なんなんだあの店員…。

男1 【最近コンビニで働く外国人も多いのです。】

男2 もうその喋り方やめてください。

男1 しかし栗木君、あんなに短時間で中国語喋れるようになるなんてさすがだね。

男2 思いつき日本語で話してたじゃないですか何言ってるんですか。

店員 【早く帰りなさいよ。】

男2 僕らはもう帰ってるんです…あなたが帰らないから帰ってない感じに見えるんですよ。

店員 【…は？】

男2 だからあなたが帰ってください！

店員 【彼はなんと(言っているのですか？)

男2 こっち来なくていいですから！

男1 【彼はとても(怒っています)。

男2 会話しないでください長くなるから、

店員 【もお早く帰りなさいよ。】

男2 それはこっちの台詞です！

店員 【帰ってちょうよ。】

男2 帰るとるわ。

店員 【帰ってちょうよ。】

店員、去る。

男2 うるさい！…もうなんなんだ、

男1 七〇一、七〇二、七〇三、ここだね。

男2 どうして僕の部屋知ってるんですか？！

男1 エントランスにポストが並んでいたじゃないか、そこで見たんだ。

男2 ……

男1 手土産も持った、おばあちゃんが寝てしまう前に挨拶を済ませよう。

男1と女、背筋をたたく。

男2 …じゃあちよつと、様子を見てくるんで、

男1 おばあちゃんにはどこまで説明してあるの？

男2 …え？

男1 ただの彼女を連れて行くのか、フィアンセを紹介するのか、

男2 そりゃあもちろん…

女は男2を見ている。

男2 フィアンセですよ。

男1 もし寝てたら、いいからね、起さなくて。

男2 …あ、はい。

男2、部屋の中へ。

男1と女は姿勢を正したまま動かない。

男2、しばし呆然として、二人の元へ。

男2 ごめんなさい、おばあちゃんやつぱり寝てました。

男1 そうか…この時間だからね、しようがない。

男2 すいません、わざわざ来てもらったのに。

男1 いいよいいよ。

男2 すいません。

男1 ここで待たせてもらうから。

男2 ……え？

男1 よいしょと。

男1、そう言って気をつけをする。

男2 ……え、え？

男1 あ、心配しないで、おばあちゃんが起きるまでだよ。

男2 ……は？

男1 かの劉備玄徳はね、諸葛孔明に味方になって貰う為彼の庵を訪れた時、一度目と二度目は留守だった。二度目訪れた時、孔明は昼寝をしていたんだけど、劉備はそれを起こさずじっと待っていたんだ。

男2 ……はあ。

男1 だから心配しないで。

男2 ……え、でも、いつ起きるかわからないですよ、おばあちゃんの事だし。

男1 そんな縁起でもない。

男2 うんそういう意味ではなくて…

男1 いいよ、僕らはこうして待っている事に慣れてるんだ。小さい頃から良くこうして二人で立たされた。雨の日だろうが関係なくね。なんだか懐かしいよ。

男2 え？

男1 祖母が厳しい人でね、宿題が解けないとすぐに家の外に追い出された、連帯責任だと言って二人してね、あれは僕が中学、妹はまだ幼稚園だったよ。

男2 ひどいな…。

男1 東大の過去問とかやらされていたからね中学生なのに、ハハハ。

男2 笑いごとじゃないじゃないですか、中学で東大の問題なんて解ける訳ない。そんなの虐待じゃない

いですか。

男1 僕がいけないんだよ、僕が頭が悪かったばかりに妹まで、

男2 うん、まあそれはそれとして、だって彼女は幼稚園ですよね？岡田さんだけならともかく…

男1 え？

男2 まあとにかく許せない事には違いありませんよ！

男1 僕らはへつちやらさ。

男2 岡田さんは良くて…

女、じつと前を見ている。

男2 飲みに行きましょうよ、三人で。

男1 酒臭い兄妹が何をしに来たんだと思われたくないもの。

男2 また目を改めればいいじゃないですか。

男1 今日連れて行くと言ってるんだろ？

男2 まあ…

男1 だったら今日待つてないよ。

男2 うーん…

男1 いいよ栗木君は中入ってて、

男2 近所迷惑ですから。

男1 そうか、それは確かにそうだね。

男2 そうですよ。そりゃあそうですよ。

男1 じゃあ玄関で待たせて貰おう、お言葉に甘えて。

男2 …あ、いや…

男1 (女に) 静かにするんだよ。

男2 一言も喋ってないですから妹さん。

女…。

男2 ねえ、いい加減名前教えてくださいよ…。

男1 栗木君の呼びたい名前でもいいんだよ。

男2 …じゃあ、今日子で。

男1 (笑いながら) 妹は恭子じゃないんだけどな。

男2 じゃあ教えてくださいよ！

男1 いやごめん、恭子じゃないなと思っただけなんだ。

男2 なんならいいんですか？

男1 いやいいんだよ恭子で。そうか叶恭子が好きなんだな。

男2 …あの、なんでも好きな名前でいいって言われて叶恭子を思い浮かべる男は相当あからさまですよ。

男1 何があからさまなの？

男2 なんでもないです、じゃあ教えてくださいな本当の名前を！

男1 いいよ、恭子で。

男2 小泉の方ですよ。

男1 ああ、そっちな。

男2 もおヤダ、どうしてそうやって僕のイメージを落とそうとするんですかお兄さん。

男1 え、叶恭子はそんなに悪い人なのかい？

男2 叶恭子さんも素晴らしい人だと思います！

男1 じゃあどういう事？

男2 いやもうなんのキョウコでもいいんです、適当に思いついただけなんで、

男1 適当なの？

男2 違います、僕は小泉今日子さんの事をかっこいいと思っております毎日頃、なので妹さんにもそんな小泉の風格があるなあといい、そう名付けました。

男1 まあなんでもいいけど、お邪魔しますよ。

三人、そのままの立ち位置から一步移動。

男2 (両手で制し) これ以上は、もう…

男1 充分さ。…そうか、これが玄関か。うん、これが玄関だね。うちには玄関なんか無いからさ、あれはなんて言うんだろ？…玄関じゃあない。

男2 ……そうなんですか。

男1 これが靴箱か。

男2 全然使っていないですけど…  
男1 靴入れないの？  
男2 そんなに靴持っていないんで。  
男1 本当だ、からっぽだ。  
男2 あんま見ないでくださいよ。  
男1 いや、おばあちゃんの靴が無いからさ、  
男2 …、  
男1 おかしいなと思って…、  
男2 …、  
男1 大丈夫かい、おばあちゃん。  
男2 …え？  
男1 認知症ではないだろうね？  
男2 …え？  
男1 いや…靴履いたまま上がってるのかなと思って。  
男2 …ああ！実はちよつと、認知症なんですよね。  
男1 そうなの？  
男2 ええ…なので本当は、今日子さんを紹介してもわかんないとは思っんですけど…  
男1 でも誠意は伝わるとは思っつよ。  
男2 …うん、そう思っつてそういう話はしたんですけどね、もう覚えてないんじゃないかな。  
男1 でもちゃんと今日来てるんだつたら覚えてるじゃないか。  
男2 …あら、ホントですね。  
男1 というか、え、よく一人でここまで来れたね？  
男2 …そうですよね。  
男1 え、一人じゃないの？  
男2 …ええ実はおじさんが連れて来てくれたんです。  
男1 え、どこから？  
男2 …え、家から。  
男1 え、おじさんどこに住んでるの？  
男2 …名古屋？

男1 え、おじさん名古屋に住んでるの？  
男2 …はい。  
男1 え、おじさんでどんな続き柄？  
男2 だから、父の…お兄さん。  
男1 じゃあおばあちゃんはお父さんのお母さん。  
男2 …はい。  
男1 おじさんは名古屋に住んでて、おばあちゃんは大阪に住んでるの？  
男2 …はい。  
男1 じゃあ今日おじさんはわざわざおばあちゃんを大阪まで迎えに行ったんだ。  
男2 …はい。  
男1 え、おばあちゃんは大阪で一人で住んでるの？！  
男2 …はい。  
男1 認知症なのに？！  
男2 …はい。  
男1 え、どのくらい一人で住んでるの？  
男2 …はい。  
男1 …ん？  
男2 おばあちゃん！？おばあちゃん！  
男2、居るはずのないおばあちゃんを探してみる。

男2 どうしましょう、おばあちゃんが居ません！  
男1 でもさっきまで寝てたんだろ？  
男2 …寝て、ましたけど…  
男1 僕はずっと玄関に居た。その間靴を持って消えたという事は…！  
男2 ……という事は？  
男1 ベランダだよ！  
男2 あ、ああ…！

男1、ベランダに出て下をのぞく。  
女もついていくがゆっくりと部屋の様子を見ている。

男1 居ない…。

男2 居ないですね…。

男1 最悪の展開ではなかったね。

男2 良かったです。

男1 じゃあどこに行ったんだらう…。

男2 空を飛べたのかもしれない！

男1 …。

男2 な訳ないですね。

男1 うん。ベランダ越しに隣の部屋に移ったのかな…。

男2 僕らよっとお隣さん見えます！

男2、外へ。そこでさらに頭を抱えている。

男1 いやでもこれはちよつと無理だな。非常用の蹴破れるタイプの壁じゃない、間隔がしっかりメートル以上もある。ベランダに足を掛けてもとても向こうまで手が届かない。おや、避難用の梯子がついてる。あ、でも梯子が降りてないって事は使っていないって事だな。だとするとおばあちゃんはどこから出て行ったんだ、玄関を通らずに…。

男2 お隣さんに聞いて来たんですけど、両隣 やつぱりおばあちゃんは来てないみたいですね。

男1 あのベランダ越しに隣に移るのはとても無理だ。それにこれを見て、

男2 これは梯子ですか？

男1 そうなんだ。

男2 下の階か！

男2、急いで外へ。そこでも頭を抱えている。

男1 …相当動揺してるなあ栗木君。こうなったら僕がしっかりするしかない。…栗木君はあの時、お

ばあちゃんは寝ていると言ったんだ。しかしこのベッドにはタオルケットが一枚しか置いてない。羽毛布団ならともかくさすがにタオルケット一枚なら人が寝てるかどうかの判別はつくだろう。という事は栗木君が見た時にはおばあちゃんは確実にここに寝ていたという事になる。栗木君がおばあちゃんを確認してから僕らが玄関に入るまでだいたい四分半が経過していた。その四分半の間におばあちゃんはこの部屋から玄関を使わずに外に出た。

男2、たばこを吸っている。

男1 いや外に出たという考えが間違っているのかもしれない…、だとすると、

男1、部屋を見回す。

男1 (女に袋を渡し) 栗木君の部屋、ずいぶん散らかっているね。おばあちゃんが来ると言うのにここまで散らかしたまんまだという事は栗木君とおばあちゃんの関係は良好なんだろうな。この中にはおばあちゃんの荷物らしき物は見当たらない。収納はそのクローゼットと押入れだけだね。それも開けっ放しだ。玄関のすぐ脇にある扉も開けっ放しだ。あれも最初から開いていた。奥は脱衣所とお風呂だ。その隣の扉はトイレだろうね。

男2、息を切らせて戻って来て、

男2 おばあちゃん、下の階にも居ませんでした！

男1 栗木君、トイレの扉を開けてくれる？

男2 トイレ？

男1 うん。

男2 …はい。

男1 ガチャ。

男2 開けました。

男1 誰も居ないね。

男2 …ええ、なんですか？

男1、回り込み。

男1 お風呂の扉も開いているね。  
男2 湿気がたまるのでいつも開けっ放しにしておくんです。  
男1 念の為、洗濯機の蓋も開けてくれる？  
男2 ……自分で開けないんですか？  
男1 もしもおばあちゃんが犯罪に巻き込まれているとしたら余計な指紋が付くのはまずい。  
男2 (急に緊迫感を持って) ……そうですね。じゃあ、開けますね (恐る恐る開ける)。  
男1 そんな所に入れる訳はないのだけど。  
男2 ……でしょうね。  
男1 おばあちゃんて、よくこういう事をするタイプかい？  
男2 こういう事ってつまり…？  
男1 隠れていて人を脅かしたりするのが好きな人かって事。  
男2 ああ、そうですねどちらかと言えば、  
男1 好きなんだね。  
男2 ……ですね。  
男1 だったら始めから隠れていればいいのに、最初おばあちゃんは寝てたんだよね？  
男2 ……はい。  
男1 電気はついてたの？  
男2 ついて？  
男1 ……ついて、  
男1 い  
男2 いて…  
男1 いて？  
男2 ませんでした。  
男1 電気はついていてなかったんだね。  
男2 はい。

男1 君は入って来て電気をつけた。その時おばあちゃんは起きなかったんだね。  
男2 ……はい、起きませんでした。  
男1 ごめん、もう一度ベッドを確認させてくれるかい？  
男2 なんですかなんですか！？僕何かまずい事言いました？  
男1 普段こういう事をやり慣れている人ならいくつかのパターンを想定して仕掛けておくはずだ。だから君が寝ていると思ったおばあちゃんはタミーの可能性が高い。  
男2 あークソーまた騙されたー、もーおばーちゅわーん。  
男1 と思ったけどやっぱりタオルケット一枚しかないからどうやってタミーを作ったんだろう？  
男2 クソー、どうやって作ったんだ！  
男1 いや違うな違う違う、おばあちゃんは認知症なんだ、そんな手の込んだ事をする訳がない。  
男2 ……ですよええ。そりやそおですよええ。  
男1 あー僕も動揺しているみたいだ。  
男2 いったん落ち着きましょうか？ (胡坐をかいて座る)  
男1 いや大丈夫、僕に任せて。  
男2 はい！ (立つ)  
男1 認知症の患者が一時的に頭が冴えるなんて事があるのかな…だからもつと勉強しておけばよかったんだ、知らない事が多すぎる。  
男2 知らないって事を知ってから人は成長するんですもんね。  
男1 そうだね。  
男2 ええ。  
男1 あれ？ちよつと待てよ？  
男2 なんですか今度は？  
男1 もしかしておばあちゃんはベッドで寝てなかったのかい？  
男2 ……え？  
男1 僕が勝手にベッドで寝ていると思っただけかもしれない。  
男2 ……ああそうですね、おばあちゃんはベッドでは寝ていません。  
男1 そうだったのかーこれ僕の悪い癖なんだ。決めつけが一番良くないといつもわかってはいるんだけど…そういう時にボロが出る。反省しなぐちや。  
男2 ……え、そうですね、ダメですよ。

男1 おばあちゃんどこに寝てたの？  
 男2 だから…この辺ですよ（曖昧に）。  
 男1 え、どこ？  
 男2 だから…  
 男1 え、こんな洗濯物の中にかい？  
 男2 …ええ。  
 男1 え、普段からそういう所で寝てるのおばあちゃん？  
 男2 …いやいつもじゃないですよ、でも毎寝の時とかは、洗濯物の中に紛れて寝ますね。  
 男1 猫みたいだな。  
 男2 なんか柔軟剤の匂いが好きみたいですわね。  
 男1 猫みたいだな。  
 男2 じゃあ猫なのかな？  
 男1 …え？  
 男2 …おばあちゃんですよわね。  
 男1 …え、まさか猫の事をおばあちゃんって呼んでる訳じゃないよね？  
 男2 …えっとこの場合どっちの方がいいんですか？  
 男1 え、何が？  
 男2 …いやそんなまさか。  
 男1 だよわね。  
 男2 ええ。  
 男1 普段から良く洗濯物に紛れて寝るのが好きなおばあちゃんだからこの洗濯物の山を見て、またおばあちゃん洗濯物の中で寝ると君は判断した。  
 男2 …そうか、そこがダメだったんですね。  
 男1 いやダメじゃないよ、栗木君は悪くない。  
 男2 ありがとう（う）ございます！  
 男1 （一人で考えている）いや違う、でもおばあちゃんは認知症なんだ、そこが僕の推理を（ことごとく邪魔していく）。

男2 うんあの、そんなにひどい訳じゃなくて、全殊普通の時もあるんです、  
 男1 そうなの！？  
 男2 ええ、もう全殊普通って言うか、ほとんど普通の時が多いんです。認知症の疑いがあるってくらいで。  
 男1 それ認知症じゃないじゃない。  
 男2 うん、なりかけの認知症って言うか…、  
 男1 え？  
 男2 とにかくまだ認知症じゃないです。  
 男1 そうか、一人で暮らしてるんだもんね。  
 男2 ええ…。  
 男1 でもそれ危ないよね本当は。  
 男2 だから、僕もそろそろ戻ろうかと思っってはいたんですけどね。  
 男1 うん、その方がいいだろうね。でもどうして孫の君がおばあちゃんの面倒を見るの？おじさんは何をやってるの？息子だろ？  
 男2 …じゃあ今度、家族会議してみますね。  
 男1 じゃあまだ認知症ではないんだ。  
 男2 はい、そういう事になりました！  
 男1 確かにお年寄りが幼児化する事はあるからね、おばあちゃんの中では遊んでるつもりかもしれないが僕らにとっては真剣にならざるを得ない。  
 男2 そうですね。  
 男1 栗木君のおばあちゃんだから相手ごわいと思うよ。  
 男2 あのばあはあ。  
 男1 きつと栗木君の性格も利用して、この洗濯物わざと人が入ってるかのようにこんもりさせておいて自分はお風呂場に隠れていた。  
 男2 ええ、それで？  
 男1 僕らが中に入ってベランダに掛け寄ったその隙に外に出たんだよ。  
 男2 …お、お！。  
 男1 それくらい事は出来そう？  
 男2 それくらい？

男1 結構身軽じゃないとダメなんだけど、

男2 …まあ出来そうっちゃ出来そうでもないですけどね、

男1 やっぱりな。

男2 え、でもなんで外行っちゃったんですか？

男1 なんてだと思っ？

男2 …お茶目だから？

男1 僕らを試しているんだよ。孫の嫁にふさわしい女かどうか、見定めようとしているんだ。

男2 …ガン。

男1 探しに行くんだ。ここで諦めたらおばあちゃんをすっかりさせてしまっ。

男2 え、でもどこに？

男1 大阪だよ。

男2 大阪…

男1 実家に来てっって意味だよ。

男2 次は大阪か…

男1 さあ行こう。

男2 でもこの時間に大阪は…

男1 車しかないだろうね。

男2 さすがに大阪まで行ったら僕はもうどうなってしまうのだろう…

男1 さあ栗木君！行くよ。

男2 …はい。

女 玄関のドアの前に立ちふさがる。

女 …。

男1 …。

【そのあと／今日子さんは／キッチンへ行き】  
この辺りから、ポツリポツリと音楽がかかる。

女 中央に立ち、大きくため息を付いた後、ポテトチップスの袋を開ける。

男1 (微笑んで) …また悪い癖が出ってしまった。少し頭を冷やそう。

【お米を二合／磨いでいる】

男1 妹はね、料理がとても上手なんだ。家にある物でなんでも作ってしまう。

【早炊きのボタンを／スイッチオン】

女、ポテトチップスを食べている。

男1もそばに寄り、袋に手を突っ込み食べる。

男2 ご飯前にいいんですか、お菓子なんか食べて…。

【鍋に水を張り】

男2もそばにより、食べる。

【沸かす】

三人、黙々と食べている。女、男1、男2の順番で食べる。

【冷蔵庫には／味噌しかない】

途中、男2が二回食べようとすると二人に冷たい目を向けられて、手を戻す。

【だけど／久しぶりの／温かい／飯と／お味噌汁】

男2 お兄さん。

男1 なんだい？

男2 二人の馴れ初めを決めておきませんか？おばあちゃんに聞かれた時、答えられるように。

男1 ああそうだね。それがいい！

【今日子さん手作り／飯を食べて】

男2 (手帳を取り出し) えっと、僕らは付き合ってからちょうど二年が経ちました。

男1 どこで知り合ったんだい？

男2 彼女が、キャラクターショーのバイトをしているので（メモをしながら）僕は…、ヒーローで

男1 うん！

男2 彼女はヒロイン。

男1 いいよ、イイ感じだよ。

【僕らは家を出た】

男2 二人でよく一緒に練習してたんです。

男1 うん、恋に落ちるのは必然の流れだ。

【レンタカーを借りて】

男2 今は彼女だけがやっていて、僕はもうやっていません。

男1 どうして？

【もちろん支払いは僕】

男2 司法試験を受けようと思って勉強してらんです。

男1 夢があるよ栗木君！

【運転も僕】

男2 僕の美家は大阪です。

男1 大阪のどこ？

男2 心齋橋の、

男1 心齋橋だつて？！

【たまたまナビが付いてない車があつて良かった】

男2 そこから南へ…

男1 びっくりした…あんな繁華街に家があるのかと思つた。

【ついてたら危なかった】

男2 まさか。そこから五分くらい行つたところにある…

男1 徒歩？

男2 …車にしましょう（メモる）。

男1 あ、うん。

【当たり前のように下道を走れば】

男2 心齋橋から車で五分くらいの町です。

男1 南へね。

男2 あ、はい（メモる）。

【当たり前前に道に迷つ】

男1 それはなんて町？

男2 あ、岡田さん、大阪詳しいですか？

男1 僕はね、大阪全然わからないんだ。

【このまま反対方向に】

男2 町名が変わつたんですよ確か。

男1 ああ、今大阪の市長がいろいろやつてるから？

【関東方面に行こう】

男2 そうなんですよ。あいや、せやねん。

男1 お菓子止まらないね。

男2 ええ…。

【し思ったけど行けず】

男1 これはおばあちゃんへの手土産なのに。

男2 食べちゃいましたけど…。

男1 あと二袋あるから。

【だって本当に道に迷っていたので】

男2 僕の両親は、幼い頃、事故で（メモする）。

男1 …ねえ、なんでそこまでメモってるの？

男2 僕には妹が一人居まして、

男1 あ、うん。

【僕は今】

男2 歳は、今日子さんと同じで…（男1を見る）、

男1 二十一歳？

【ここを走っているのやじ】

男2 ですね。

男1 何されてるの？

男2 学生です。

男1 結婚してるんだよね？！

【暗く細い山道は】

男2 …デキちゃった婚で。

男1 おいおい…

男2 と思ってた結婚したらデキてなかったんです。

男1 どちらなの？

【急カーブの連続で】

男2 今は幸せに暮らしてます。ほらあの、ほら…

男1 ん？

男2 ほら、田舎の…

【雨が降ってきた】

男1 滋賀県の？

男2 そう滋賀県の！

男1 うん。

男2 どこでした？

男1 大津だろ？

男2 正解です（メモする）。に住んでいて、

【どしゃ降りだ】

男2 親戚にはおじさんが居るんです。

男1 名古屋にね。

男2 おじさんというの？

【さらに視界が悪くなり】

男1 お父さんのお兄さんで

男2 そうそう（メモする）。

男1 やっぱ真面目な栗木君は、そこまでメモしないとけないだなんて。

男2 幾つくらいでしたっけ、おじさん？

男1 それは聞いてないけど？

【すぐ脇は崖みたいで】

男2 じゃあ、六十…

男1 おばあちゃん若くに産んだね？

【ちようど】

男2 えっとおばあちゃんの歳が？

【ガードレールの補修をしながら】

男1 もうすぐ八十なんだろ？

【その隙間から】

男2 そうそう（メモる）。

照明・音楽カットアウト。

【落ちた】

【思ったら塵ではなく】

照明戻る。

どしゃぶりの雨音。

男1 …危なかったねえ。

男2 今日子さん、大丈夫ですか？！

女、お菓子を食べた。

男2 …良かった。

男1 良かったね、塵じゃなくて。

男2 ああ、これは川ですか。

男1 みただね、しかも小さいよ。

男2 これ、脱輪しちゃってますね。

男1 どうしよう、持ち上げられる？

男2 無理ですよこれは。

男1 レンタカーってロードサービスの保険入ってるのかな。

男2 ああ…、(ヘッドライトの向こうに目を凝らし) あれ、あそこ、家がありますよ。

男1 ああ、本当だ。

男2 僕ちよつと人呼んできます。

男1 え、大丈夫？

男2 何がですか？

男1 一緒に行こうか？

男2 いやいいですよ、今日子さんを車に一人で置いておくのも悪いし、この雨の中走らせる訳にはないですし。

男1 ホント優しいなあ、君は。

男2 ちよつと行って来ますね。

男1 ねえ栗木君。

男2 は、はい。

男1 靴、履いてこれは良かったのに。

男2 …ですね。

男2、駆けだす。

【僕には勝負があつた／あれは別荘か空き家だ／誰もいないだろう】

男2 はあはあ、はあはあ…

【僕は無理矢理ドアをこじ開け】

男2、濡れた髪を手で払い、ニヤリと笑った。

男2 さてと、もうひと勝負始めよう。

【ここが僕の妻家だ】

男2 (振り返り手を振る) おーい、岡田さん。

音楽。

男2の顔が懐中電灯の明りに照らされる。

家主の声 おい！なにやっつてんだお前？

男2 ……

男2、ゆっくりと振り返り手を挙げる。

【ぼろ負けだ】

〜終〜

【上演記録】二〇二四年九月五日～九月八日 セツ寺共同スタジオ【名古屋公演】

九月十二日～九月十四日 大阪市立芸術創造館【大阪公演】

十月三日～六日 こまばアゴラ劇場【東京公演】

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。  
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」どうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

[theatrical\\_unit\\_oysters@yahoo.co.jp](mailto:theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp)